

「翔べ！ ジョニー」

作・石黒秀和

ここは台所の片隅。昆虫目線の世界。

舞台と客席との境界がほとんどなく、なんとなく猥雑な空間。

その中央に黒光りする粘着性ゴキブリ捕獲機(ゴキブリポイポイ)がある。しかし、見方によっては客席も含めたこの空間そのものが、巨大なゴキブリポイポイとも言えそうだ。

どこからともなく忍び込むおどろしい音楽。

一匹、また一匹と四方八方から現れるゴキブリたち。

客席の中を、餌を求めて徘徊し、

N「この世に嫌われ者は数々あれど、彼ら彼女たちほどひたすら意味も無く嫌われている存在は無いのではないか……」

徘徊するゴキブリ。

しかし、一同が向かうはなんともうまそうな匂いを発しているゴキブリポイポイのその中央！

N「昆虫綱ゴキブリ目ゴキブリ。全世界に約四千種。うち日本列島には約五十種。黒色扁平長いヒゲ。出現したのは今から約三億年前。あの有名なシーラカンスやカブトガニ、果ては恐竜より古い時代を生き抜いてきたまさに生きた化石の王者……なのに……。キモイ！ グロイ！ チョームカツク！
特に人間の女性達によるその忌み嫌われ方は、それはもうまったくもって理不尽情け容赦なく、毒ガス、スリッパ、新聞紙！ とにかくあらゆる手段の虐殺行為が、いたって平和な家庭のいたって平穏な日常の中で日々粛々と繰り返されており……。そうして今宵もまた……」

ぷつぷり切れる音楽。

徘徊していたゴキブリたちの足はいつの間にかゴキブリポイポイにくっついてしまっている。

全てが固まった一瞬の間。

恍惚から目が覚めたように我に返るゴキブリたち。

(一斉に早口に、つまりゴキブリたちの時間は人間のそれよりはるかに速く)。

三号「へっ。」

二号「こいつはなんだいっ？」

四号「こいつはなんだい？」
六号「こいつはなんだい？」
八号「こいつはなんだい？」
九号「こいつはなんだい？」
十号「こいつはなんだい？」
十一号「こいつはなんだい？」
十二号「こいつはなんだい？」
三号「こいつは・・・なんだい？」

短い間。

九号「納豆だ！」
二号「ゼリーでしょ！ コーヒーゼリー？」
八号「ハ？ 何言っとる、ガムだがねえ！」
二号「(同時に)ゼリー！」
九号「(同時に)納豆！」
八号「(同時に)ガム！」
三号「(中央に置かれたエサを)食いてえ〜」
六号「(三号に触れられ)イヤーン」
九号「!(彼は六号の声にイチコロ。以後、その色声にいちいちイチコロ)」
八号「たままない! この匂い!」
十一号「早く食いてえ、早く、食いてえよお〜(と匂いのもとへ行こうとするが)」
六号「(ネバネバがまとわりつき)イヤン、ヤメてえーん、もお」
九号「!!」
七号「(六号に)うるさい!」
十二号「(ベソかいて)あ〜ん、とれないよお〜」
十一号「俺が見つけたんだ! 俺が、先に(行けない)」
十号「うーん、来てます来てます」
九号「え? なにか?」
十二号「あ〜ん、僕はもうダメだあ!」
九号「だからなにがあ?」
十一号「横取りはさせねえぞ!」
九号「もう、これなんなの!?!」
十号「来てるんです!」
九号「だからなにがあ!?!」
六号「いやいや! (あつちに)イクイク! 行かせてえ〜!」

九号「三ノックダウン」

七号「もお！ うるさいってば！」

四号「わくかりましたぞお〜！」

四号の声にとたんに静かになる一同。

九号「(へろへろになって)だからあ、なにが？」

四号「これは、ゴキブリポイポイ！」

一同「！・・・ゴキブリ、ポイポイ！」

四号「(頷く)」

十一号「新しい食いもんか？」

四号「(ガクッ)」

二号「なにそれ？」

四号「人間の糞です」

三号「人間の？」

九号「ワナ？」

四号「(頷く)」

十一号「うまいのか？」

四号「(またガクッ)つまり、このネバネバで、私たちゴキブリを捕まえるんです」

一同「！・・・(息を呑む)」

十一号「ねりアメか！」

九号「どうして？」

四号「どうしてって、そりゃ殺すために決まってるじゃないですか！」

一同「！・・・」

九号「殺す・・・！」

三号「そ、そんな、大変じゃないですか！」

四号「ハイ大変です」

二号「は、早く逃げなくちゃ！」

八号「ほだね！」

十二号「(声にならない悲鳴を上げ)！」

十一号「オ、オウ！」

と一斉に逃げ出す一同。

しかしその粘着力は強力。

四号「あ、でもこれはですね」

九号「あーこんなうっとおしいの。オレ様が食いちぎってやる!（と食らいつき、両手と顎がくっついてしまう）フガ?」

四号「もがけばもがくほど、色んなところがくっついて、とれなくなってしまいうんです。まだ片足だけなら・・・」

九号「! フガフガ!」

二号「ちよつとあなたね! そんなことはもつと早く(言つてよ!)」

十一号「そうだそうだ! 大体知つててなんで(くっついてる!)」

四号「イヤ、それが、ゴキブリの本能・・・食べ物のニオイには、わずかばかりの理性など・・・(恍惚)」

九号「フガフガ!(恍惚)」

三号「確かにいいニオイですもんねえコレ(とこちらも恍惚)」

一同も恍惚。

中央のエサのニオイに引き寄せられる。

と、そこへ一号と五号がやってくる。

その姿に再び我に返る一同。

しかし一号と五号は恍惚のまま。

二号「ダメよ! こつちに来たらダメ!」

四号「ワナですぞ! これは人間の罠!」

五号「サ、酒え」

一号「ハ」

六号「だめえ! だめえ!」

八号「あっち! あっち!」

十一号「オ、オイ! 助ける! お前たち、オレを、助ける!」

と一同(七号以外)で必死に目を覚まさせるが、結局くっついてしまう一号と五号。

一号「(やっと我に返り)こいつはなんだい?」

五号「・・・なんじゃこりやあゝ・・・ヒック(彼はひどいアル中で正気なのか終始不明。つまりかなりイっちゃってる)」

十一号「ったく、なにやっつてんだよ!」

二号「バカ!」

七号「・・・」

一号「エ? どこ? ここ。なに? これ!」

一同「……」

と、突然の高笑い。

驚き見回す一同。

高所にとまっている一匹の蚊。

十一号「な、なんだなんだ？ お前」

蚊「蚊ですけど」

八号「判つとるがね！ なに笑つとんの！」

蚊「イヤ、皆さんが、あまりにも愚かなので」

十一号「！ なにい！」

蚊「本当に、本能のおもむくままですね、あなたたちは」

三号「助けてくれるの？」

十二号「エ？(とその顔が輝く)」

蚊「！ ご冗談を」

十二号「！(とその顔がシュン)」

六号「血なら、ホラ、吸わしてあげるからあん」

十二号「！(とその顔が再び輝き)」

三号「あ、僕も！」

八号「アタイも」

四号「ワタクシも」

一号「僕も」

十一号「あ、オレも(と腕など捲ったりして)」

十二号「あ、あのお……」

と我先にと色んなとこ捲つて。

皆必死。

と、

蚊「ククク(堪らず下品な高笑い)で(ヒヤヒヤヒヤヒヤゴゴゴゴホ(とあまりの高笑いに咳き込んだりする)」

十一号「ムツとすると同時に自分の行いに恥ずかしさも覚え)なんだ？ 助ける気ないんだつたら早くどっか行きやがれ！」

蚊「イヤですよ、こんな面白いもの」

二号「見世物じゃないのよ！」

蚊「他人の不幸は蜜の味……イヤイヤどんな血より美味いってね」

十一号「なんだとお!」

蚊「最期まできちんと見届けさせていただきますよ」

一号「最期?」

十二号「最期って・・・なに?」

蚊「オヤオヤ、皆さんはまだ、自分たちの置かれた立場についてよく理解なされてないようですね」

十一号「あ?」

十二号「立場?」

一号「?・・・どういことですか?」

蚊「皆さんは、死ぬんですよ、朝になったら」

一同「!」

三号・十二号「ど、どういこと?」

蚊「だから、朝になったら、ジエンド。お陀仏。おしまいなの」

十一号「だから、どうして、朝になったら」

蚊「もう! 理解が悪いなあと言った感じで、ここらで別の場所に飛んでもいいかも。蚊は唯一この中で自由に動ける存在なので時々飛ぶ。またその飛ぶときに、あの不快なブーンという翅音を笛みたいな小道具で自ら発せられないか・・・(あのね・・・朝になったら、人間が起きてくるでしょ?)」

一同「(うん)」

蚊「そしたらここ覗くでしょ?」

一同「(うんうん)」

蚊「(お客さんに)明日は何曜日?」

お客さん「(ここでは一応月曜日と答えること想定する。日曜日の場合は以下アドリブで)」

蚊「そうね、月曜日。(お客さんに)お宅の燃えるゴミの日何曜日?」

お客さん「(月曜日と答えた場合はそのまま。他の曜日で答えた場合は以下同じくアドリブで)」

蚊「でしょ。なら・・・こんなにたくさんのごキブリがかかってたら、即効捨てるに決まってるでしょ?」

三号「なにを?」

蚊「・・・コレを」

一号「どこに?」

蚊「だから燃えるゴミに」

一同「!・・・」

十一号「(小さく)燃えるゴミ?・・・」

蚊「そしたら、そのゴミ、どこに運ばれると思う?・・・(物色しお客さんに)ハ

イ！ そのあなた！」

お客さん「(清掃工場と答えること想定し)」

蚊「そう清掃工場。(以下はご当地ごとに変える)正確には豊田市では渡刈クリーンセンター！ ちなみに不燃物はグリーン・クリーンふじの丘ね。で、その渡刈クリーンセンターに運ばれて(と懐からマッチとり出し)」

一同「・・・」

蚊「1200度の炎で(火をつけて)ポツと燃やされて」

一同「・・・」

蚊「悲鳴上げる間もなく一瞬で(火を吹き消す)」

一同「!・・・」

蚊「灰も残らない」

三号「ウソだあ」

蚊「ウソなもんか(四号に)なあ」

四号を見る一同。

十一号「そうなのか？」

四号「・・・」

十一号「あ!？」

四号「・・・(小さく頷く)」

一同「!」

十二号「ヒェ」

六号「イヤーン」

怖ろしさに固まる一同。

ガクガク震え出し、

蚊「(高笑い)」

十一号「そ、そんなあ・・・」

一号「僕たち潰されるのには慣れてるけど・・・」

八号「燃やされるのは・・・イヤだがね・・・」

十一号「オ、オウ、そうだ、どうせなら潰してくれ。いつそいつもみたいにな、ひ

とおもいに、スリッパか新聞紙で、ブチュって潰してくれよ!」

三号「シューでもいいからさあ! シューって、一思いに!」

と突然猛烈に脱出を試みる一同。

我先にと。

悲鳴。

蚊の高笑い(咳き込み)。

四号「皆さん！　ここは冷静に！　そんなにもがいたら、手も足も！（しかし自分もかなりパニック）」

もがく一同。

四号と七号以外はすでに色んなとこくつき動けなくなっている。

蚊「笑いつつ（こりや、ほんと、最高だ！　こいつあ、最高の、エンターテイメントショーだよ！（涙流して大笑い）」

忍び込む音楽。

それでももがく一同の中、溶暗。

高まる音楽。

暗転。

闇。

無音。

と、聞こえてくるグスグスという小さな泣き声。

静かに照明入る。

動けなくなり半ば放心している一同。

泣き声の主は十二号。

十一号「泣くな、オイ」

十二号「(グスグス)」

十一号「泣くなって」

十二号「(グスグス)」

十一号「泣くな！」

十二号「エーン」

十一号「・・・」

八号「(十一号に)ちよつとあんた」

一号「あー、腹減ったなあ」

二号「あのね、あなたね(こんな時にどんな神経してるの?)」

三号「そうだねえ、できればコロッケ食べたい・・・松丈の」

八号「！ 何言っとるの！ あづまやの文ちゃん焼きだがね！」

四号「イヤイヤ上坂の五平餅の方が」

一同「イヤイヤイヤ(と上演地の「当地グルメを言い合う)」

二号「……」

何やらブツブツ眩き(基本的には「来てます来てます」と言っている(お祈りしている十号(こいつはずっとこんな感じで怪しい))。

十一号「なにやってんだ？ お前」

十号「伝説のゴキブリを呼んでるんです」

十一号「ハア？」

十号「(祈りつつ)大丈夫です。もうすぐ、彼が助けに来てくれますから(ブツブツ)」

十一号「(危ない)……」

五号「オウ！ 裸になって、何が悪い！ おーい、サケく……ヒック(そして歌など歌う)」

十二号「もうダメなんです。僕は、もう……(グスグス)」

六号「あーん、イヤーン、触らないでえ(一同はかなり密着した状態にある)」

九号「(興奮)」

と、とにかく騒々しい一同。

と、

七号「いいかげん静かにしてくれないかなあ？ あんたたち」

振り向き、

静かになる一同。

七号を見る。

二号「いつ、瞬るの？」

七号「抱いていた卵を隠すようにして(いつだっかっていいだろ？ お嬢ちゃんには関係ないことだよ)」

二号「そ、そんな(言い方しなくても！)」

七号「それにさ、みっともないよ。あんたたち。諦めなよ。運命なんだからさ。

これがあたいたちの運命」

一同「……」

七号「今さらジタバタしたってしょうがない」

一同「・・・」

七号「受け入れなよ。きつぱり諦めて、自分の運命、受け入れな。あたいはもうとつくに受け入れたよ」

一同「・・・」

一号「でも、諦めるには、まだ早いかと」

二号「(見る)」

一号「希望を失うには、まだ」

七号「・・・(と突然噴出すように笑い)希望？ 希望ってなに？ なんの希望？ まさかここから逃げ出す？ (笑い)やめとくれよ。もう無理だよ、こうなったら、分かってんだろ？」

一号「・・・」

七号「それにさ・・・ゴキブリなんだよ？ あたいたちは。生まれたときから最低虫けら以下の、ゴキブリ野郎なんだ。そんなあたいたちに・・・希望なんて・・・あるわけないだろ？ エ？」

一同「・・・」

七号「諦めるんだよ。そんなものはさ、きれいさっぱり、もう・・・諦めて、静かにいくんだよ」

一同「・・・」

一号「だけど・・・」

二号「どうしてないの！」

七号「(見る)」

二号「私たちに、希望が、どうしてないの？」

七号「・・・(微苦笑し)これだから、世間知らずのお嬢ちゃんは・・・ケッ！」

二号「！」

七号「じゃ聞くけど、なんなの？ あんたの、その希望ってのは？ エ？」

二号「それは・・・」

七号「(一号に)「いつとやることかい？」」

二号「(気色ばって)違います！」

七号「じゃなに？ 食うことかい？ それとも人間にでもなりたいつてか？(笑う)」

二号「・・・」

七号「笑わせるんじゃないよ。ないんだよ。あたいたちには、希望なんて、もともと、生まれたとき・・・(首振り)イヤ生まれる前から、一切！」

二号「！・・・」

七号「(苦笑し)でもさ、それだつていいじゃないか。別にいいじゃないか。それ

があたいたちの運命なら……ただ死んでくだけの運命なら……それも……」
二号「……」

七号「それに命あるものいずれは必ず(死ぬ。 だったら案外平等)……」
二号「一同「……」」

七号「(そう思ったらなんだか笑えてきて)だったらさ……」

一号「でも、子供たちは……」

七号「(見る)」

一号「生まれてくる子供たちには」

七号「希望があるってのかい？」

一同。

七号「この子たちには、希望が？」

一同。

七号「(苦笑し)(冗談じゃないよ。 それこそ地獄じゃないか。 ここで生き残ったって(結局は)……偽善はやめとくれよ。 あたいはね!……(卵抱き)一緒にい
くよ」

一同「……」

七号「そもそも、生まれてきたところでこの子たちに……(何か言おうとした

その時)」

三号「うわぁ、なにやってるの？」

七号「!……」

見る一同。

何やらモコモコしている九号。

十一号「お、お前!……食べてんのか?」

九号「(口の周りの粘着物質を食べている)」

八号「ゲっ」

二号「キモ」

六号「(オエッ)」

三号「おいし〜の!」

五号「サケ〜」

見守る一同。

九号、だんだん勢いついてきて、モグモグモグモグ食べると、ついにくつついていた顎がとれる！

九号「うわあ！」

三号「とれた！」

一号「すごい！」

二号「やっぱキモ」

六号「アーン」

八号「やるじゃないあんた！」

九号「お！ やった！ とれた！ とれたぞ！」

蚊「呆れたな」

祝福の一同。

と、

十一号「アハハ、アハハハハハ、アハハハハハハ、アハハハハハハ！ どうだ！

見たか！ 希望だ！ これぞ希望だぞ！ ハハハ！ ハハハハ！ 食いしん

坊万歳！ ゴキブリ万歳！ アハハ、アハハハゴホゴホゴホ．．．（四号に）オ

イ！ オレたちもコレ食っちまえば助かるんじゃないのか？」

そ、そうだそうだと食おうとする一同。

四号「イヤ、ダメです！」

十一号「なんで？」

四号「たまたまです。彼はたまたま」

十一号「そんなことやってみなくちゃ分からないじゃないか？」

一号「そうですよ。一か八かここは」

頷く一同。

食べようとして。

蚊「(高笑い)」

一同。

蚊「(笑いつつ)やっぱり、お前たちは愚かだ(笑い)」

一同「……(その笑い声に、次第に、冷静になっていく)……」

四号「……助けを呼びましょう」

二号「エ?」

十二号「助け?」

四号「(頷く)」

九号「誰に?」

四号「仲間です。仲間にはひっぱってもらえば、あるいは……」

一同「……!」

十一号「お、おう、そうだな」

一号「仲間……うん。そうだ。仲間を呼べば!」

二号「そうね」

三号「そうだね」

八号「そうだわ!」

十二号「うん!」

九号「仲間だ! お、おーい!」

一同「おーい! 誰か助けてくれ! おーい(などなど)」

と、蚊、再び高笑い。

十一号「なんなんだ? てめえはよ!」

蚊「もう、お腹痛くって……これ以上笑わせないでくださいよ」

九号「うるせえ黙ってる! このヒヨロヒヨロバンパイア野郎! おーい!」

蚊「(笑いつつ)だって、もう来るわけないでしょ?」

九号「アン?」

一号「どうして?」

二号「そんなの判んないじゃない!」

蚊「だって(指差し)フェロモン」

一同、自らの尻を見る。

十一号「それがどおした?」

蚊「出てますもん。さっきから、そこから警報フェロモンがバンバン」

二号「!(思わずお尻押さえ)警報フェロモン……」

蚊「あんまりギャーギャー騒ぐから、垂れ流し……残念でした」

三号「そんな……」

十一号「・・・じゃ、やっぱ、お前、助ける！」

蚊「(舌出し)ブー」

九号「てめえ！(と勢い余り、前のめりになって再び顎がくつつく)フガ？」

蚊「キャハハハハハハ！」

一同「・・・」

と、

三号「あ、じゃあさ、人間に、頼んでみたら？」

と、その突拍子もない意見に一瞬で固まる一同。

二号「エ？」

三号「だから、人間に」

十一号「何を？」

三号「助けを」

一同「・・・」

間。

蚊の、再び狂ったような高笑い。

三号「だって人間ならきつと」

十一号「お前バカか！」

一号「それは、さすがに」

四号「ウーム」

一号「・・・」

二号「大体、人間に私たちの言葉通じないでしょ？」

十一号「通じたって絶対助けないね、あいつらは」

六号「そうね」

一号「そうですね」

十二号「そうだそうだ」

四号「ウム」

十二号「あいつらの僕たちゴキブリの嫌い方と言ったら・・・まさにイジメだから」

十一号「いやイジメなんてそんなレベルじゃないぜ、アレは・・・犯罪だぜ。大量殺戮！　ホロコースト！」

一号「ホイコーロ？」

八号「アタイ中華好き！」

五号「サケえ〜」

八号「・・・」

十一号「つたく、何が万物の霊長だ？ 太陽系唯一の知的生物だ？ 野蛮人じゃ

ねえか！ 人間は、冷血動物・・・トカゲよりヘビよりチヨー冷たい、史上最

低の、冷血動物だぜ！」

五号「オラは冷より熱爛だぜい〜」

二号「・・・そうだね。地球に生まれたのは私たちが先なのに」

十一号「もつと先輩を敬えってんだ！（お客さんに向かって）そもそもね、最近の

若いもんは、礼儀がね！・・・（と適当に説教）」

一同「（も口々に）」

三号「・・・」

一号「でも、どうして僕ら、そんなに嫌われてるんでしょうか？」

見る一同。

十一号「あ？」

一号「イヤ、いくら人間が野蛮だからって、あの意味もないヒステリックな嫌い

方はとても尋常じゃない気がするんです」

四号「確かに」

十一号「毒を持つてるわけでもねえのになあ」

二号「私たちの、何が気に食わないってのかしら？」

一同「（考える）」

と、

三号「あ！ きつと、食べちゃうからじゃないの？」

六号「食べちゃう？」

二号「なにを？」

三号「ホラ、人間の食べ物。僕たち夜中にこっそり」

十一号「あんなの！ ほんのちよっとじゃねえか！」

三号「でも、ホラ、食べ物の恨みは怖ろしいって言うし」

十一号「けっ、ちっちえ〜」

四号「あ、そういえば、ゴキブリの名の由来も、御器かぶり、つまり器をかじる
ってところから来てますからね」

十一号「そうなのか？」

六号「ごき、かぶり？」

二号「なんか、無理やりね」

八号「アタイは器なんてかじらんわ」

三号「(うんうん)」

十一号「まあ、でもな、確かにオレたちは、なんでも食うからなあ。髪の毛、クレヨン、歯磨き粉、新聞紙」

二号「でも、その力で私たちは三億年もこの地球を守ってきたんでしょ？」

四号「森の掃除屋として」

十一号「腐った木を分解してな」

十二号「まさにエコですよ。エコロジスト！」

一号「エゴイスト？」

十二号「・・・」

六号「(お客さんに)シロアリもそうなのよ(とシロアリがいかに地球のために働いているかを説明)」

二号「そもそもなんでも食べることの何が悪いのよ？」

三号「そうそう。子供の頃お母さんに言われたでしょ？ お野菜でも何でも残さず食べなさいって！ それに、人間の髪の毛、ホントおいしいよね」

十一号「お！ アレはうまい！」

四号「私はちよつと固めがいいです。そうアルデンテ！」

六号「私はとにかく太いのが、イイ！」

八号「アラ、細めの白髪も結構いけるだがよ」

三号「何よりさ、フケがついてるともうたまらなくて・・・(よだれ)」

一同もよだれ。

と、

二号「ゴキブリ食べるんですって」

十二号「へ？」

十一号「何食べるって？」

二号「だから、ゴキブリ」

十二号「誰が？」

二号「人間」

一同「！」

十一号「あいつら・・・ゴキブリ食うのか？」

二号「(頷く)」

十一号「そりやなんとも」
十二号「グロイ」
一同「・・・」
十一号「最低だな。オレたちいくらなんでも、ゴキブリは・・・」
一同「・・・」
一号「でもどんな味するんだろ？」

見る一同。

一号「イヤ、ゴキブリの、味」
三号「おいしいのかなあ？」
一同「・・・(考える)」
十号「エビです」
八号「しゃべった」
一号「エビ？」
十号「そう、エビの味がします」
一号「・・・て、あなた食べたことあるんですか？」
十号「ハイ」
一同「ギョッ」
十一号「いつ？」
十号「昔です。それから神の声が聞こえるようになりました」
八号「神の声？」
十号「伝説のゴキブリです」
一号「伝説？・・・」
十一号「・・・なあ、その、さつきから伝説のゴキブリって、なんだ、それ？」
十号「伝説のゴキブリは・・・伝説の・・・ゴキブリです」
十一号「(コケて)だから」
四号「あー私聞いたことあります。確か、この世の終わり、十一匹のゴキブリが助けを呼んだとき、伝説のゴキブリが、現れるとか(なんとか)」
十号「(急に神がかりになり)その者、光とともに現れん。東の楽園より、十一匹の友を助くるために・・・来てます。来てます」
二号「でも十二匹だよ。私たち」
十号「・・・(ブツブツ)」
八号「なんだあ」
一号「ダメじゃん」
三号「エ？　ダメなの？　助けに来てくれないの？　シンセツなゴキブリ」

十一号「デンセツ!」

七号「フン」

六号「アーン(と深い溜息)」

十二号「(また泣きべそ)」

十号「・・・(ブツブツ)」

蚊「(失笑)」

十一号「お前まだいたのか!」

と、その時、扉を開ける音とともに人間が階段を降りてくる音。

蚊「あ、ヤベ! (と飛び去る)」

六号「なあに? この音? エ? なあに?」

十一号「に、人間だあ!」

一号「もお起きてきたんだあ!」

三号「イヤー!!」

一同パニック。

まさに阿鼻叫喚。

と、足音、素通りして扉を開けると、しばらくしてトイレの流される音。

出てきて階上へ。

静寂。

放心の一同。

戻ってくる蚊。

蚊「あーびっくりこいた。アレ?」

と、その視線。

一匹だけ足がとれている四号。

四号「(も気づき)アリ?」

一同も気づく。

一同「!」

四号「と、とれています! とれています!」

二号「どうして・・・」

十一号「どうやって?」

四号「あ、確か、私があなたの背中に乗ってですね、それであなたが私を突き飛ばして・・・」

一号「!　そうか!　協力です!　協力し合えばいいんですよ!」

三号「協力?」

一号「ハイ」

十一号「あ、オレ、そういうのは苦手だから・・・」

二号「どういうこと?」

一号「だから協力して一匹ずつ脱出すればいいんです。あなたは、両手が使えるから先ず隣の人につかまって、あなたはその足を外す」

八号「エー」

一号「大丈夫。次は二人でその人ひっぱって、次はあなた、次はあなた」

二号「あー、なるほど!」

四号「それだったらいけますね」

六号「イケるわ!」

三号「うん!」

十一号「協力最高じゃねえか!」

五号「サケだあ!」

三号「助かるんだね?　僕たち、助かるんだね!」

十号「来てます来てます」

十二号「(うれし泣き)」

七号「・・・」

十一号「あ、じゃ、ホラ、お前から、早く!」

と、脱出劇、始まる――(アクロバティックに、時にちよつとなまめかしく、音楽にのせてでもいい。しかし七号だけは協力しない。時にお客さんも使ったりして、一匹、また一匹と外れていく。順調に進む脱出劇。しかし七号以外の最後の一匹の時、バランス崩したある者を助けようと思わず手を出した七号。その時、抱えていた卵を落としてしまう。愕然の七号。しかし他の者は誰もそのことに気づかない。七号、卵に覆いかぶさる。そして――七号以外脱出成功。喜ぶ。

十一号「さ、最後だ」

九号「(七号に)オイ、あんた!」

一号「さ、つかまって」

四号「とりあえず卵こっちに」

しかし覆いかぶさったまま動かない七号。

九号「早く!」

二号「もう意地張らないで!」

しかし頑なに動かない。

十二号「また人間来ちゃうよ!」

二号「ホラ! 早く!」

七号「・・・」

十一号「・・・ま、ほっとくか」

二号「そんな・・・」

一同「・・・」

と、突然、一号が七号を抱く。

七号「! ヤメロ!」

一号引き寄せる。

拒絶する七号。

そこに四号も加わる。

二号、九号も。

団子になって七号を引き剥がす。

全員脱出。

三号「やったあ!」

喜ぶ一同。

しかし七号は青い顔。

それに気づく一号。そして愕然。

一同も気づく。

ゴキブリポイポイに残っている七号の卵。

一同「!」

一号「はがそう!」

四号「ダメです! そんなことしたら、膜が破れて中の子供たちが死んでしまします!」

一号「でも!」

九号「一か八か、やってみようぜ!」

十一号「あ、ああ」

とはがそうとして、

七号「やめとくれ!」

一同「!」

七号「いいんだよ。もう、ほっとしておくれ」

一号「でも・・・」

七号「言っただろ? あたいは・・・もう・・・(怒りを込め)ほっとしておくれよ!」

一同「!」

一同「・・・」

十一号「そうか・・・」

九号「じゃあな」

八号「悪いね」

十二号「ゴメンナサイ」

三号「じゃ」

五号「あばよ」

十号「来てます来てます」

とそれぞれ去っていくゴキブリたち。

最後まで残った一号と二号。

しかし、二号も去る。

一号「・・・あの」

七号「行きなよ」

一号「でも・・・」

七号「行けつてば!」

一号「!・・・(頭下げ去る)」

一人残った七号。

(正確にはそんな様子を蚊がずっと見ている)。
七号、ゆっくり卵の側にいくと、身体を横たえ、

七号「大丈夫、あたいは、どこにも行かないよ」

と、子守唄を、歌う。

優しく、愛しく、悲しく。

そしてゆっくりその足をゴキブリポイポイに。

見守る蚊。

溶暗。

闇。

どこからか声。

声「起きろ、起きろ、起きろ」

目を覚ます七号。

顔を上げると、そこに白い仮面をつけたゴキブリ①が浮かび上がっている(幻影。蚊もいない)。

七号「父ちゃん?」

ゴキブリ①「・・・」

七号「父ちゃん! (立つ)」

ゴキブリ①「醜いな」

七号「エ?」

と別のゴキブリが同じく白い仮面をつけ浮かび上がる。

ゴキブリ②「汚らわしい」

七号「!」

次々出てくる白い仮面をつけたゴキブリたち。

ゴキブリ③「こっちにくるな!」

ゴキブリ④「近寄るな!」

七号「!・・・父ちゃん」

ゴキブリ⑤ 「ほんと、醜いその姿」

ゴキブリ⑥ 「恥だな。ほんとに、お前は、恥」

ゴキブリ⑦ 「なんで生まれた」

ゴキブリ⑧ 「なんで生きてる」

ゴキブリ⑨ 「早く消えちまえ」

ゴキブリ⑩ 「とつとつこの世から消えちまえ！」

七号「・・・」

ゴキブリ⑩ 「負け犬」

ゴキブリ⑪ 「売女」

ゴキブリ⑫ 「ウザ！」

ゴキブリ⑬ 「クセっ！」

七号「・・・」

ゴキブリ⑭ 「お前に仲間なんていねえんだよ」

ゴキブリ⑮ 「お前に希望なんてねえんだよ」

ゴキブリ⑯ 「もお死ね」

七号「！」

ゴキブリ⑰ 「早く死ね」

数匹「死ね」

更に加わり「死ね」

全員「死んじまえ！」

七号「うるさい！」

消える仮面のゴキブリたち。

照明、現実。

肩で大きく息をしている七号。

びっしょりかいた汗。

卵を、愛おしく撫でる。

と、

七号「(立ち)誰？」

立っている一号。

七号「あんた・・・何しに来たのさ？」

一号「あの・・・」

七号「フン、笑いに来たのかい？」

一号「イエ．．．」

と、やってくる二号、三号、四号、八号。

七号「な、なんだよ？ あんたたち．．．そうかみんなで笑いに来たんだね？ そ

れとも同情かい？ そうだね、気持ちいいもんね、同情するのは。かわいそう

だねえ、大変だねえって、自分の幸せ確認できるもんね」

一同「．．．」

七号「いいよ。せいぜい同情していつてください(と座る。いつしか戻ってくる

蚊)確かに最高の見世物だからね。他人の不幸は．．．人にとっても、ゴキブ

リにとっても．．．(と鼻歌など歌う)」

一同「．．．」

と、突然、三号が怒ったようにやってくるとその足をゴキブリポイポイに乗せる。

驚く一同。

七号も。

七号「あ、あんた!」

三号「(我に返り)あ、アレ？ あの、どうして？ 助けて!」

とやってくる一号。

助ける．．．のではなく自らも足乗せる。

七号「!」

四号、八号、そして二号も。

七号「あ、あんたたち!(何するの?)．．．」

三号「(エエ〜)」

一号「バカですからね、僕たちゴキブリは」

二号「ホントどうしようもないバカ」

八号「だね」

四号「理性より本能なんです。理屈じゃないんです。勝手に身体が動いちゃうんです」

三号「イヤ、僕は、あの．．．(落ち込む)」

一号「(大きく頷く)」

七号「!・・・あたいは・・・感謝は、しないからね。これはあんたたちが勝手に」

一号「ハイ勝手にやったことです」

四号「ウム」

二号「エエ」

八号「気にしんどいて」

三号「イヤ、だから僕は、あの・・・」

七号「・・・あんたたち・・・」

十一号「じゃオレも勝手にやるぜ」

二号「あ」

と現れた十一号も足を乗せ・・・るまでになんり躊躇というか逡巡するが・・・最後には乗せ。

十一号「あー、あんたは嫌いだけどよお、オレは・・・オレたちは、後から悔やむようなことはしねえんだ。心が、いやがるようなことは、決して。美学だからな。それが、ゴキブリとして生まれ、生きる、オレたちゴキブリオヤジの、それでも失わない少年のような、ピュアな美学」

とチヨイ悪オヤジをキメる・・・が、やっぱり少し後悔？。

・・・と、

六号「(も現れ)アラ、ゴキブリ女だってそうなのよ。(七号に)ごめんなさいねまたうるさくなっちゃって。でもお私たち基本忘れっぽい、特に嫌なことはずぐ忘れちゃうの。学習能力ゼロ。でもねえ、その方が幸せじゃない? なんでもかんでも他人のせいにして、恨んで妬んで生きるより・・・自分のことは自分で・・・責任とる(と足乗せると身体震わせ)アーン、コレなんだかクセになっちゃういそう(とお客さんに吐息漏らしたりする)」

一同。

七号「あんたたち・・・ホント勝手にしなよ」

六号「ハイ勝手にします」

七号「・・・」

蚊「(笑い)まったく、どこまで、愚かなのか」

十一号「(蚊に)あんたもそろそろこっち来たらどうだ? 見てるより参加したほうがいいぜ!」

蚊「ご遠慮しときます」

十一号「そりゃ残念」

蚊「・・・」

八号「ほだけど、みんなじゃないだね」

十一号「それは、ま、しょうがないだろ」

四号「色々事情もあるのでしようし」

三号「あの、僕も、実はちよつと用事が・・・」

二号「(三号に)勇氣あつたわ、あなた」

十一号「おう、見直したぜ。さすが男だ」

三号「僕男じゃないです!」

十一号「女なのか?」

一号「・・・でも、なんか、うれしいです」

二号「エ?」

一号「イヤ・・・なんか・・・」

八号「ま、受け入れたんだわね、アタイたちも、運命を」

十一号「つて、ことなんだわな。きつと・・・アン・・・」

七号「・・・」

一同「・・・」

と、突然、うわあー、来てまーすという叫び声とともに九号と十号が走ってやってくる。

そしてくつつく。

十一号「おう! お前たちも来てくれたか! (うれしく頷き)信じてたぞ! さすが男!・・・(つてお前たち男だよな?)」

九号「くつついちゃつてることに気づき)アレ? (思い出し)あ、アレ!」

十号「来てます!」

と二匹が指差したその方向に、巨大なアシダカグモ!

蚊「うわあ! マズイ!(と飛び去る)」

十一号「お、お前たち!」

一号「ア、ア、アシダカグモだ!」

六号「イヤーン!」

十一号「連れてきやがったな！」

九号「だって！」

十号「来て！・・・しまいました！」

三号「食べられるう〜」

八号「やだがね、食われるのはやだがね！」

襲い来るアシダカグモ。

再び阿鼻叫喚のそこへ、音楽とともに現れる一匹のゴキブリ！

ゴキブリ「待てえい！」

一号「あ、アレは！」

十一号「ま、まさか！」

十号「来たあー！」

九号「伝説の、ゴキブリ？」

ゴキブリ「ハッハッハッハッ」

と高らかに笑い、

マント翻しポーズ決めたそのゴキブリは、五号！

しかし、あきらかにその様子は・・・酔っている。

二号「(数えて)でも、まだ十匹・・・」

四号「酔ってますね、アレは、完全に・・・」

十一号「どっかでまた一杯やりやがったな」

一号「じゃただの酔っ払い・・・」

しかし五号は何を思ったかアシダカグモに立ち向かっていく！

戦う五号。

見えないところすごい音。

格闘。

応援する一同。

(立て！ 立つんだジョーニィ〜などと)。

音楽。

そして、

五号の声「(大絶叫)ウワァ〜・・・」

静寂。

九号「食われたのか？」

一号「でも行っちゃいましたよ、アシダカグモ」

八号「助かったがね・・・」

三号「やっぱ伝説のゴキブリだったのかな？」

十一号「でも助かってないだろ？ オレたち、実際・・・」

三号「・・・」

四号「ま、でも、とりあえず」

二号「朝までは・・・」

八号「ほだね」

四号ほか数匹、死んだ？ 五号に合掌。

と、戻ってくる蚊。

蚊「イヤー、びっくりこいた。あ？」

と、いつの間にか、最後の一匹、十二号が立っている。

九号「(気づき)あ」

見る一同。

十二号「あの、僕・・・ゴメンナサイ・・・」

一同「・・・」

一号「いいんだよ」

十一号「全員、来る必要なんかない」

九号「バカは十匹で充分」

三号「(ボソッと)一匹は死んじゃったし・・・」

六号「そうだよ」

一号「そうですよ」

四号「はい」

七号「(頷く)」

十二号「・・・ほんとにゴメンナサイ・・・」

忍び込む音楽。

溶暗。

照明入る。

どれだけの時間が経ったのか、しかし残された時間はわずか。それぞれの思いの中にいる十一匹と少し離れて一匹。そして蚊。

一号「ねえ、東の楽園ってどこかな？」

九号「あ？」

二号「楽園？」

一号「あ、ホラ、(十号)あの人が言ってた、その者、光とともに現れん。東の楽園より・・・って」

九号「あー、伝説の・・・」

十号「(また神がかりになり)その者、光とともに現れん。東の楽園より、十一匹の友を助くるために・・・ほんとに来てます！」

九号「(うんざり)もう分かったっつちゆうねん！」

十一号「そりゃアレじゃねえか・・・(分からず、四号に)なあ」

四号「エゲレスというところだと聞いたことがあります」

九号「エゲレス？」

四号「この窓の向こう、海という大きな水溜りの、そのまっすぐと向こうにある場所で、そこではゴキブリたちが、無意味に殺されることもなく、差別も、飢えもなく、平和に、暮らしているという・・・」

十一号「まさに楽園だな」

一号「そうですね」

三号「行ってみたいなあ」

二号「きつといいゴキブリがいっぱい住んでるんでしょうね」

八号「ほだねえ」

四号「そうですね」

九号「オレたちみたいなの？」

一同「笑う」

と、突然、

四号「何してるんですか！」

振り向く一同。

そこには、七号の腕を押さえている四号。

二号「どうしたの？」
九号「どうしたどうした」
四号「この人、自分の卵を、叩き割ろうとしてたんです！」
一同「！（立ち上がり）」
一号「どうして！」
七号「離してくれ！ これ以上、あんたたちには……この子たちさえいなければ、あんたたちは！……」
一同「！……」
九号「バカ野郎！」
三号「そうだよ。バカ野郎……」
四号「そりゃゴキブリはみんなバカ野郎ですけど……」
十一号「見損なうなよ！ オレたちは……真正銘本物のバカ野郎なんだ！」
四号「大きく頷く」
二号「もう何回叩かれたことか。何回潰されたことか。それでも、私たちは、何度でも起き上がる。しぶといんです。私たち。とにかくしぶとく生きる。それが……ゴキブリ野郎。最低、虫けら以下の、ゴキブリ野郎！」
九号「そうだぜ」
一号「そうです」
三号「うん！」
四号「ハイ」
七号「……」
十一号「長さじゃねえんだよ」
七号「……」
四号「（頷き）どう生きるかなんですな」
七号「……」
三号「（も頷き）どう生きたかなんだね」
七号「……」
一号「（も大きく頷き）そんな仲間なんです。僕たちは」
七号「……」
九号「ゴキブリ野郎の」
十一号「バカ野郎仲間」
一号「ハイ」
二号「ええ」
八号「だがね」
十号「ん」

六号「(色っぽく)イエース」

九号「(メロメロ)はあい」

蚊・十二号「・・・」

七号「(その頬に、生まれてはじめて流れる涙)」

十一号「あーあ、なんか辛気臭くなっちゃったなあ！」

九号「あ、それでは、私が元気になる曲を一曲(エヘンエヘン)エー、(例えば「千の風になって」などを歌う)」

八号「ものすごい縁起悪いがねえあんた！」

九号「・・・」

一同の笑い。

と、誰ともなくある歌を歌いだす。

それは、やがて全員を巻き込んだ大合唱となる。

力強く。

晴れやかに。

歌い終わる。

外はいつしか白々明けてきている。

二号「もうすぐ朝だね」

一号「そうですね」

十一号「腹減ったなあ」

三号「そうだね」

キューと蚊のお腹が鳴る。

見る一同。

蚊「(ちよつと恥ずかしく)イヤ、違いますよ。(三号指して)その人じゃないんですか？」

また蚊のお腹が鳴る。

蚊「・・・あ！」

と、蚊が何かを見て驚く。
その様子に、一同も見る。

と、そこにいる十二号の身体が、朝日に照らされ白く輝き始めている。
驚く一同。

十一号「お、お前？」

四号「ま、まさか！」

十号「その者、光りとともに現れん。東の楽園より、十一匹の友を助くるために……ついに……キタあー！」

二号「ウン……」

三号「伝説の、ゴキブリ？」

二号「(数え)でも、十匹……」

と、その時、アシダカグモに追われた五号が奇声を発しながらやってきてくつづく。

十一号「お前！」

九号「生きてたのか！」

五号「ういー、酔っ払いをなめんなよ！ アチヨー(とブルースリーのマネ)」

二号「十一匹！」

三号「あ、でもクモもやってくるよ！」

十一号「なんだ倒してねえんじゃねえか！」

五号「(アチヨー……)」

迫り来るアシダカグモ。

顔上げる十二号。

まるで別人のようなその凛々しい顔。

ゆっくりやってくると、その足を乗せる。

九号「ホントに本物か？」

十二号「(頷く)」

一号「助けに来てくれたんですね？」

十二号「(頷く)」

三号「じゃ早く！」

十二号「落ち着け」

一同「!……」

十二号「私が、助ける」

十一号「でも、そんな一緒にくつついちゃまって、どうやって助けてくれるんだ

よ？　ぐずぐずしているとクモも人間も来ちまうぜ！」

三号「あ！　来る！　クモ来る！」

九号「やっぱダメなのかあ？　・・・」

十二号「・・・お前たちの羽はなんのためにある？」

十一号「あ？」

九号「羽？」

二号「でも、この羽で空を飛ぶことは」

十二号「誰が言った？」

一同「・・・」

十二号「私たちが空を飛べないなんて誰が言った？」

一同「・・・」

十二号「飛ばなかっただけじゃないのか？」

一同「・・・」

十二号「みんなで、一緒に、飛ばなかっただけだ」

一同「・・・」

十二号「さ、行こう」

一同「・・・」

十二号「エゲレスに」

一同「・・・」

十二号「みんなと一緒に」

一同「・・・」

十二号「飛んで、行こう！」

一同「・・・」

八号「エゲレス・・・」

二号「楽園・・・」

一号「イヤ、でも・・・」

九号「ムリだよなあ、それはやっぱり・・・」

六号「ねえ」

八号「ほだほだ」

四号「ウム」

うんうん頷く一同。

十二号「・・・」

三号「来るよ！　もう来る！」

十一号「やっぱりダメなのかあ……」

諦めの一同。

十二号「……エ？ どうして？(と元に戻っていき)だって……エ？ 僕……
ダメ？……(グスン)」

一同覚悟決める。

いよいよ最期の時。

と、

七号「大丈夫だよ」

顔上げる一同。

一同「？」

七号「あたいたちは飛べる。今なら信じられる。あんたたちと一緒になら、きっと
飛べる。あたいたちは……！」

一同「……」

間。

一号「そうだね」

四号「そうですね」

三号「希望？」

二号「(頷き)希望」

八号「これがアタイたちの……？(七号に)そうなのかい？」

見る一同。

七号「……(笑顔で、大きく頷くと)希望だよ」

一同「！」

五号「ホープ！」

と、今、一同の心が、一つになった！

湧き上がる希望。

一号「エゲレス……」
二号「楽園……」
三号「エゲレス」
四・六号「エゲレス！」
七・八・九号「エゲレス！」
全員「エゲレス！」

音楽、荘厳に、イン。

いつしか開いた窓から光りが差し込む。

それはまさに、東の空から。楽園につながる扉のように。

蚊は仰天。

そこには、まさに白く輝く七号と十一匹たち。

笑顔で互いを確認しあうと、東の楽園、エゲレスを見る。

眩しく昇ってくる太陽の光り。

希望に満ちた十二匹の顔。

襲い来るアシダカゲモもすでに彼らの敵ではない。

気持ちを一つにして助走をつける十二匹。

自由の翅をいっばいに広げ、ゴキブリポイポイごと、彼らは楽園へと、

翔んだ！

暗転。

闇の中。

パタパタと翅音。

そこにブーンという翅音も加わり、

十一号の声「なんでついてくるんだ」

蚊の声「最期まで見届けるって言っただろ？ そう、エゲレスまで」

十一号の声「勝手にしろ」

蚊「(高笑い——咳き込み)」

カーテンコール。

音楽にのせて観客も巻き込み圧倒的に。